

大被詞

高天原に神留り坐す 皇親神漏岐・神漏美の命以て、八百万神等を神集へに集へ賜ひ、神議りに議り賜ひて、我が皇御孫之命は、豊葦原乃水穗之国を、安国と平らけく知し食せと事依さし奉りき。

如此依さし奉りし國中に、荒振る神等をば、神問はしに問はし賜ひ、神掃ひに掃ひ賜ひて、語問ひし磐根・樹立・草の垣葉をも語止めて、天の磐座放ち、天の八重雲を伊頭の千別に千別きて、天降し依さし奉りき。

如此依さし奉りし四方の國中と、大倭日高見之国を安国と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて、皇御孫之命の美頭の御舎仕へ奉りて、天の御蔭・日の御蔭と隠り坐して、安国と平らけく知し食さむ国中に、成り出でむ。天之益人等が、過ち犯しけむ雑雑の罪事は、天津罪……国津罪……許許太久之罪出でむ。

如此出でば、天津宮事以て、天津金木を本打切り末打断ちて、千座の置座に置き足らはして、天津菅麻を本刈断ち末刈切りて、八針に取辟きて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ。

如此宣らば、天津神は天の磐門を押し披きて、天の八重雲を伊頭の千別に千別きて聞し食さむ。国津神は高山の末、短山の末に上り坐して、高山の伊穂理、短山の伊穂理を撥き別けて聞し食さむ。

如此聞し食してば……罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧・夕の御霧を、朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津辺に居る大船を、舳解き放ち艦解き放ちて、大海原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、焼鎌の敏鎌以て、打掃ふ事の如く、遺る罪は在らじと、袂へ給ひ清め給ふ事を、高山の末、短山の末より、佐久那太理に落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織津比売と云ふ神、大海原に持ち出でなむ。

如此持ち出で往なば、荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百会に坐す速開都比売と云ふ神、持ち可呑みてむ。如此可呑みてば、氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神、根国底国に氣吹き放ちてむ。如此氣吹き放ちてば、根国底之国に坐す速佐須良比売と云ふ神、持ちさすらひ失ひてむ。

如此さすらひ失ひてば……罪と云ふ罪は在らじと、袂へ給ひ清め給ふ事を、天津神、国津神、八百万の神等共に、聞し食せと白す。